

ベルリンを脱出せよ

第二次世界大戦下、ヨーロッパ駐在員の足跡

第二次世界大戦においてわが国は、イタリア・ドイツと共に「日独伊三国同盟」を締結した。昭和十五年のことである。この同盟によって日本の対英、対米関係は極端に悪化し、太平洋戦争への突入は不可避となった。時代の流れとはいえ、憂うべき状況が国全体を包み込んでいったのである。同じ頃、海外で働くビジネスマンにも戦争の影響は甚大だった。戦火に追われつつ任務を果たし、祖国に残した家族を心配し、そして自らは日本へと帰り着かなければならなかった。日本銀行の職員として例外ではなかった。ローマからベルリンを経てなんとか帰国を果たしたのは、のちに第二十四代総裁となる前川春雄だった。

取材・文 河村清明



満洲里駅

満洲里

1945年6月3日
満洲里に到着

羅津

敦賀

1945年6月30日 東京
敦賀港に到着

ベルリンからの脱出行

昭和二十年の七月、つまりは終戦を翌月に控え、日ごとに敗色が濃厚となりつつある朝だった。

この時、前川家は熱海に暮らしていた。三月十日の東京大空襲で東京・本郷にあった自宅を焼け出され、疎開していた。家の造りは細長く、初めて訪れた人には小さな玄関が見つけにくかった。

午前六時をまわり、すでにあ

りは明るかった。初夏の一日が始まる中、一家の初孫、数えで五歳になった絃一が洗面所で歯を磨いていた。母・たかは縁側にいた。眼前には庭と、さらには海が、彼方へと広がっていた。

ザッ。突然、庭の一角で土を踏みしめる音がした。気配に顔を上げると、一人の男が立っていた。

「やあ」

向けられた言葉の響きは優しくな。懐かしさを伴って聞いた。

何が起きたのか、それでもまだわからなかった。目の前に立っているのはたしかに夫だったが、しかしこうして突然、現れるはずがあるだろうか。その人だとはどうしても信じられず、たかの目は自然と男の足下に向いた。

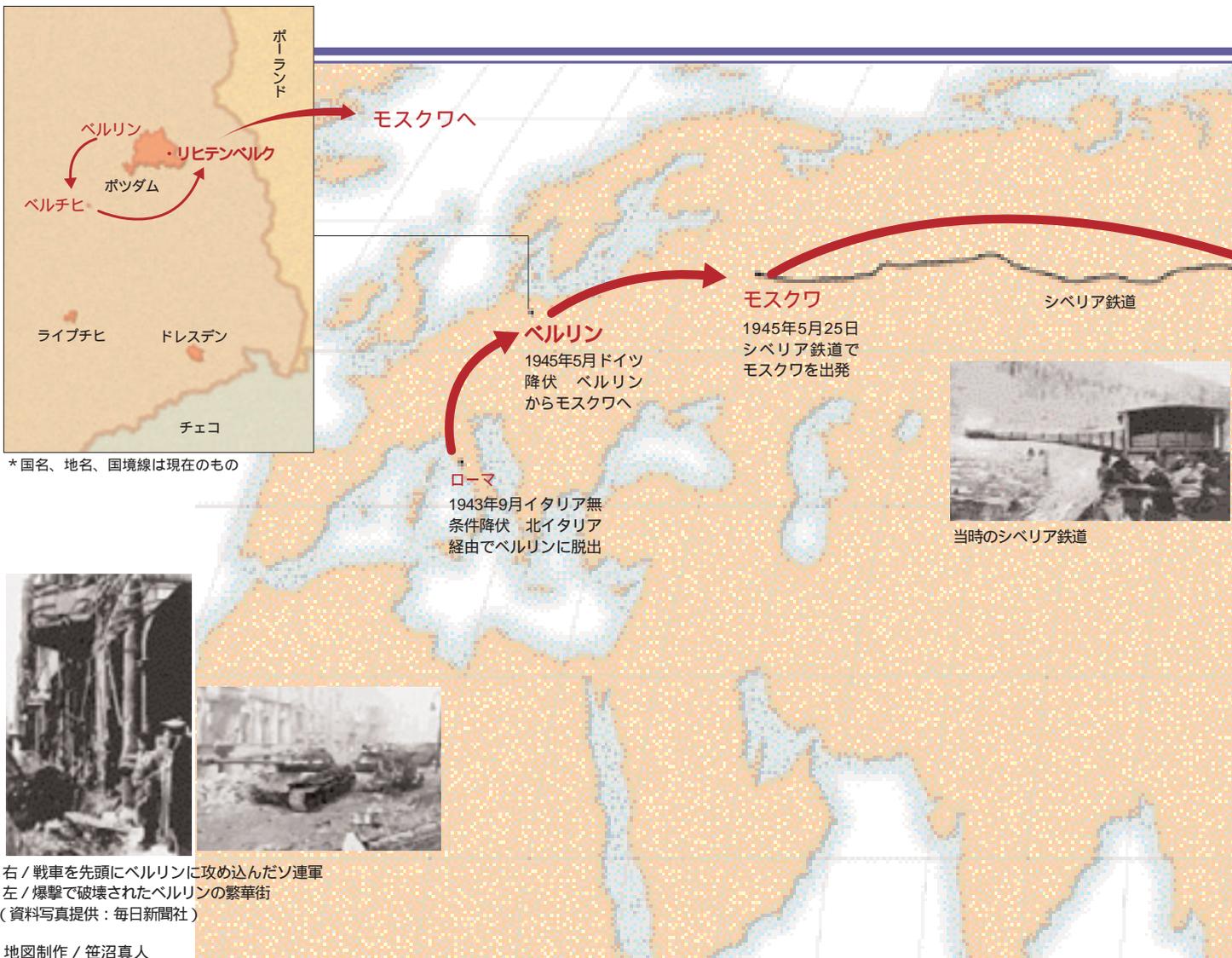
幽霊なら足はないはず……。

子供じみた行動をつい取らせるほどに、その帰還は唐突だった。

夫とは昭和十五年に結婚した。前年に、日本銀行の本店から神戸支店へと異動になったから、新婚時代は神戸で過ごした。翌十六年には長男の絃一が生まれた。

だが、長男誕生の二カ月後、夫は突然、ローマでの駐在を命じら

* (注) ……文中の敬称は省略しました。また、役職名などはすべて当時のものです。



* 国名、地名、国境線は現在のもの



右 / 戦車を先頭にベルリンに攻め込んだソ連軍
左 / 爆撃で破壊されたベルリンの繁華街
(資料写真提供：毎日新聞社)

地図制作 / 笹沼真人

れた。学生時代からフランス語に親しみ、その語学力を買われての抜擢だった。当時の日銀にイタリア語の話せる職員は一人もいなかった。時代の趨勢が、イタリアとの親密な関係を要求していた。

昭和十五年九月に締結されたのが「日独伊三国同盟」である。これによって日本は、いわゆる枢軸国の一員となった。日銀でもパリ、ロンドンから駐在員を引き上げ、一方でベルリン、ローマへの派遣が決まった。その際、前川春雄に白羽の矢が立ったのだった。

赴任した当初、遠く離れてはいても、国際電話や手紙で連絡は取れた。その頃、たかは幼子を連れて実家の青森に戻っていた。国際電話と言っても六〇年以上も前であり、青森で受け取れることはできず、ひと晩をかけて東京まで出向いた。回線の状態も思わしくなく、「もしも、聞こえますか？」と互いに言い合っただけで通話の終了したこともあった。ただ、それでも満足だった。戦火が日一日と激しさを増す中、夫の無事が確認できるだけでもありがたかった。

だが、やがて音信は途絶えた。

手紙をいくら出してても、届いているのかどうかさえ判断としなかった。安否はしばらく不明のまま、この直前、ようやく中国東北部（旧満州）からの電報を受け取ったばかりだった。

目の前にその姿を認め、少しの間を置いて落ち着きを取り戻すと、たかは長男に声をかけた。「お父様が戻ってこられたから、こっちにいらっしやい。早く！」そう急かせても、照れているのか事情が飲み込めないのか、紘一はキョトンとしたままだった。

やがて姿を見せた息子を見て、夫がつぶやいた。「大きくなったなあ」日本を離れてからは夢に決まって赤ん坊が出てきた……。そう聞かされたのは、その後しばらく経ってからのことだった。

第二次世界大戦が始まったのは昭和十四年九月、ナチス・ドイツのポーランド侵攻が引き金となった。ドイツは一カ月足らずでポーランドを征服すると、続いて北欧諸国、オランダなどを相手に電撃作戦を押し進め、ついにはパリをも陥落させるに至っ

た。

この前後、日本ではドイツ・ブームが起こった。昭和十一年の「日独防共協定」を基盤として、全体としてそもそもがドイツびいきの傾向にあった。大使館を始め、銀行、商社、新聞社などはこぞってドイツ駐在員を増やし、国民の多くがその戦勝を言信していた。

前川春雄は昭和十六年四月に日本を発っている。ニューヨーク及びベルリンに赴任する職員と一緒に

だった。アメリカを経由したため

ローマへの到着は七月になった。

いずれはスイスに駐在してもらおう。

当初はそう言われていた。そのためスイスの都市ではどこがいいか、調査報告を求められてもいた。

しかし、その年の十二月、太平洋戦争が勃発し、状況は一変した。職員は分散せず、ローマにとどまるよう本店から指令が来たのだ。

前川は、先輩駐在員の鍵山覚と共に職務に当たった。やがて大使館の仕事を手伝うことが多くなり、イタリア語に関してはまったく

くゼロからのスタートだっただけに、その苦労は想像に難くない。

昭和十八年に入ると、戦局は連合国軍有利に傾き始めた。枢軸国側からは情報が入らず、そのため中立国に人を送り、情報収集の必要が生じた。鍵山がリスボンへ向かい、結局前川一人がローマにとどまることになった。

この年の二月、東部・スタールングラードでの攻防戦によって、ドイツは大きな打撃を受けて敗北した。三月一日にはベルリンが初の大空襲に見舞われ、街は火の海と化した。また七月にはムツソリーニが失脚、ついには九月、イタリア臨時政府は連合国軍と休戦協定を締結した。

降伏を知って、前川は北イタリアへと向かった。ドイツ軍の支配力がまだそこに残っていたからだ。十月になって、ようやくベルリンへと辿り着いた。前川の安否を現地ではひどく心配していた。事なきは得たが、しかし置かれた状況は束の間の安息に過ぎなかった。

問をおかず、再びイタリアへ向かうことになった。日本

とイタリアとの間の金融協定が期限切れを迎え、更新の手続きが必要となったのだ。その実務は日本政府の代理人として正金銀行が行っていたが、通訳から文書作成までを前川が担当した。

この頃、イタリアには二つの政府が並立し、どちらの政府を交渉相手とするかが判然としなかった。だから、交渉の相手を特定するだけでも骨が折れた。イタリアに向かう途中の車にはチェーンがなく、雪山で危うく事故に巻き込まれそうになった。また、政情不安から周辺にはゲリラが多く、治安も悪かった。まさに危険と隣り合わせの任務にほかならなかった。

協定延期の調印を終えて再びベルリンに戻ると、今度はドイツに危機が訪れていた。

昭和十九年六月六日は「ノルマンディー上陸作戦」の実行当日として広く知られている。その後の七月二十日にはヒトラー暗殺が図られ、未遂には終わったが、ドイツ敗戦の気配は濃厚となるばかりだった。前川は外出する際、必ずシエルターの位置を確認した。つ



前川元総裁（右）は明治44年東京に生まれた。日銀には昭和10年に入行した。「自分には厳しいけど、人にはとても親切。怒鳴ることもなかった。だからなのかしら、皆さんに好かれましたね」と、たか夫人（下）は往時をしのぶ。「僕は三度敗戦を見た」としばしば口にした。



まりはそれくらい、頻繁に空襲に脅かされていた。だが、そうした環境下にあっても、ヨーロッパ情勢の情報を収集し、本店へと暗号で打電を続けた。

ベルリン陥落も間近であり、在住邦人には避難場所を見つける必要があった。時が時だけに、その候補は簡単には見つからず、ベルリンから南西へおよそ七十五キロ、ベルチヒという小さな街がやがて浮上した。隣町・マールズドルフにはシュロス（城）があつて、いよいよの場合にはそこに籠城する計画が立てられた。昭和二十年二月初旬のことだった。

一〇〇人あまりが生活を送れるよう、ベッド設置など、シュロスに作業が加わった。この時も若い前川は充分な働きを見せた。だが戦況はその間も悪化し、四月十二日、ついにはベルリンに連合軍が迫ったと伝わり、周囲に緊張が走った。その報を受け、日本領事館からは全面的な退去命令が出た。二日後、シュロスには百数十人の日本人が集まった。追いかけるように五月三日頃、ヒトラーの死亡とベルリン陥落の知らせが届いた。

五月四日の朝には、突然、ソ連（現ロシア）の兵隊が大挙して押し寄せた。ドイツ兵をかくまっていたいなか、城内を見せると言つた。その検閲においてトラフルは生じなかつたが、以降は歩哨が居残り、一行を保護・監視した。昭和十六年に締結した日ソ中立条約のおかげで、危険にだけはさらされなかつたが、しかしどう扱われるかは、その時点では不明のままだった。

五

月十八日を迎えた。
今からモスクワへ行く

今度はソ連の司令官が姿を見せ、唐突にそう告げた。

急いで荷造りをする、東ベルリンにあるリヒテンベルク駅の近くに連れて行かれた。市内の現状が当然のごとく気になったが、宿舎からの外出は一切許されず、何もわからなかつた。

どれくらいをモスクワで過ごすのかと一行は気を揉んだが、結局汽車を乗り換えただけに終わった。それからすぐに中国東北部（旧満州）へ向かい、到着したのは六月三日だった。

ひたすら東に向かう長い車中では、窓のフラインドはすべて下ろ

され、外を見ることは禁じられた。それでも前川は時おり隙間から外を覗き、武器や物資など、全勢力を東方へと運ぶソ連軍の動きを察知した。当時、すべての日本人には、中国東北部だけは安全だとの認識があつた。しかし、どうやらその極東を、ソ連は標的としている様子だった。

敗戦は避けられない……。

そんな思いが胸を支配した。

ソ連との国境に近い朝鮮・羅津港らしんに乗り、五日をかけて敦賀港に到着した。港では、まさに出航したばかりの三隻とすれ違い、「いつてらっしゃい」「お帰りなさい」と、互いに手を振り合った。もちろん誰の胸にも安堵の思いがあつた。しかし、あることがその直後、先を行く二隻が、米軍の散布した機雷に触れて炎上した。

沈みゆく船を見つめつつ、何もできない無力感にさいなまれた。自分たちはかろうじて帰国できたが、一歩間違えればどこで死んでもおかしくなかつた。そんな現実をあらためて突き付けられていた。太平洋戦争は、依然、終わってなごいながつた。

終

戦後、銀行マンとしての日常を取り戻した前川は、主に海外畑を歩み、ついには昭和五十四年、第二十四代の総裁に就任した。五年の任期を務め上げたのちに引退し、平成元年、病気にて逝去した。温厚で明るい性格と的確な金融政策により、名総裁の一人として賞賛する声は今もなお多い。

昭和五十七年、日銀が創立百周年を迎えた際、記念に作られた百年史に前川は序文を寄せ、福沢諭吉の論集の一節を引いてみせた。

《群雁野に在て餌を啄むとき、其内に必ず一羽は首を揚げて四方の様子を窺ひ、不意の難に番をするものあり、之を奴雁どがんと云ふ》

日銀は「奴雁」の役目を果たさなければならぬ。若き日、上司に教えられた言葉を忘れてはいなかつた。そして後輩たちにも伝え直したわけだ。あらためて思えば、ヨーロッパでさまざまに奔走した前川こそ、戦時中の、まさに奴雁ではなかつたか。寒夜首をあげて仲間を守るその姿こそ、前川の生涯を貫く姿勢ではなかつたか。